

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第42集

た げ じょう
多 気 城 跡

— 林道東多気線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

平成9年3月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の北西部にそびえる多気山（標高377m）は、中腹にある多気不動尊への参拝や四季を通じてのハイキングコースとして親しまれていますが、中世の大規模な山城跡としても全国的に知られています。

この多気山全山を城郭とした多気城跡の面積は、150haとも200haとも考えられ、その規模は関東地方屈指と言われています。また、他の多くの遺跡が開発等の憂き目を見る中であって、この多気城跡は幸いにも遺存状態が非常に良好であり、御殿平と呼ばれる山頂部を中心に山肌のいたる所に堀・土塁・曲輪等が確認され、往時の姿を偲ぶことができます。

さて、多気城は、戦国時代末期、中世宇都宮氏の軍事的拠点として極めて重要な役割を担ったと考えられていますが、その実態についてはまだ明らかにしなければならない部分が多いようであります。今回の調査は、多気山中腹を通る林道建設に伴うものであり、城跡全体からみればほんの一部にすぎませんが、多気城跡内における初めての発掘調査として、堀や土塁の構造等、貴重な資料を得ることができたと考えております。

この度、これらの成果を報告書として発刊する運びとなりましたので、各方面におかれまして広くご活用いただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、調査にあたりご指導をいただきました諸機関・諸先生並びに、終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成9年3月

宇都宮市教育委員会
教育長 大塚 一之

例 言

- 1 本書は、宇都宮市田下町725-2 他に所在する多気城跡（宇都宮市登録遺跡番号134）に係わる林道東多気線建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宇都宮市が費用を負担し、宇都宮市教育委員会がこれを実施した。
- 3 調査期間は平成3年10月1日～平成4年1月31日であり、調査面積は約500㎡である。
- 4 遺跡地における測量、写真撮影等は吉澤宣行の協力を得て、梁木誠がこれにあたった。
- 5 本書の執筆・編集は、大塚雅之、神野安伸、今平利幸との協議の上、梁木がこれにあたった。なお、編集にあたっては、平成4年度に実施した割田遺跡及び平成6年度に実施した多気城跡遺構所在調査等の成果を一部盛り込こんだ。
- 6 本遺跡の図面・写真等は、宇都宮市教育委員会で保管している。
- 7 発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔指導助言〕	国土館大学教授	大川 清
	宇都宮大学教授	石部正志
	宇都宮市文化財保護審議委員	埴 静夫
	同	大金宣亮
	同	橋本澄朗

〔事務局〕

教育長	藤田昌平	文化財保護係	大塚雅之
教育次長	田辺雄三	同	神野安伸
文化課長	安達光政	同	今平利幸
文化財保護係長	定岡明義	博物館建設推進班	白井義雄
文化財保護係	手塚英男	同	小松俊夫
同	梁木 誠	埋蔵文化財囑託員	吉澤宣行

〔調査補助員〕 阿部 昭、阿部はるみ、大垣俊亜、大垣ヤスヨ、大塚 清、木滑トミ子、木滑一枝、小松寅男、斉藤京子、鈴木銘一、鈴木 巡、吉沢良介

- 8 発掘調査及び報告書作成に関しては、次の諸機関、諸氏のご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

文化庁記念物課、栃木県教育委員会文化課、栃木県埋蔵文化財センター、栃木県立博物館、峰岸純夫、増渕 徹、市村高男、田熊清彦、阿部 昭、荒川善夫、八巻孝夫、三島正之、関口和也、池田 誠、佐伯正廣、田中祥彦、松岡 進、丸山忠顕、上村敏彦、西股総生、高田佳実、鴨志田智啓、阿久津義正、高山伝治、小野口順久、半田昭雄

目 次

序 文

例 言

I 調査にいたる経緯	1
II 遺跡の環境	
1 多気城跡の立地と現状	2
2 多気城跡の歴史的背景	6
III 調査の方法と経過	
1 調査方法	7
2 調査経過	7
IV 確認された遺構	
1 曲輪部の概要	9
2 北辺の堀・土塁	10
V まとめ	14

挿 図 目 次

第1図 多気城跡位置図	1
第2図 多気城跡縄張図	3・4
第3図 多気城を取り巻く主な城郭（戦国期）	6
第4図 曲輪部縄張図	9
第5図 北辺の堀・土塁全体図	11
第6図 内側土塁と石積み	12
第7図 堀と外側土塁の断面図	13



多気城全景（南上空から）

標高377mの多気山は、ほぼ全山が中世の山城跡であり、山肌には現在も無数の堀・土塁及び曲輪跡が残る。なお、手前（写真下）に見えるのは長大な堀・土塁が確認された割田遺跡である。平成4年撮影。

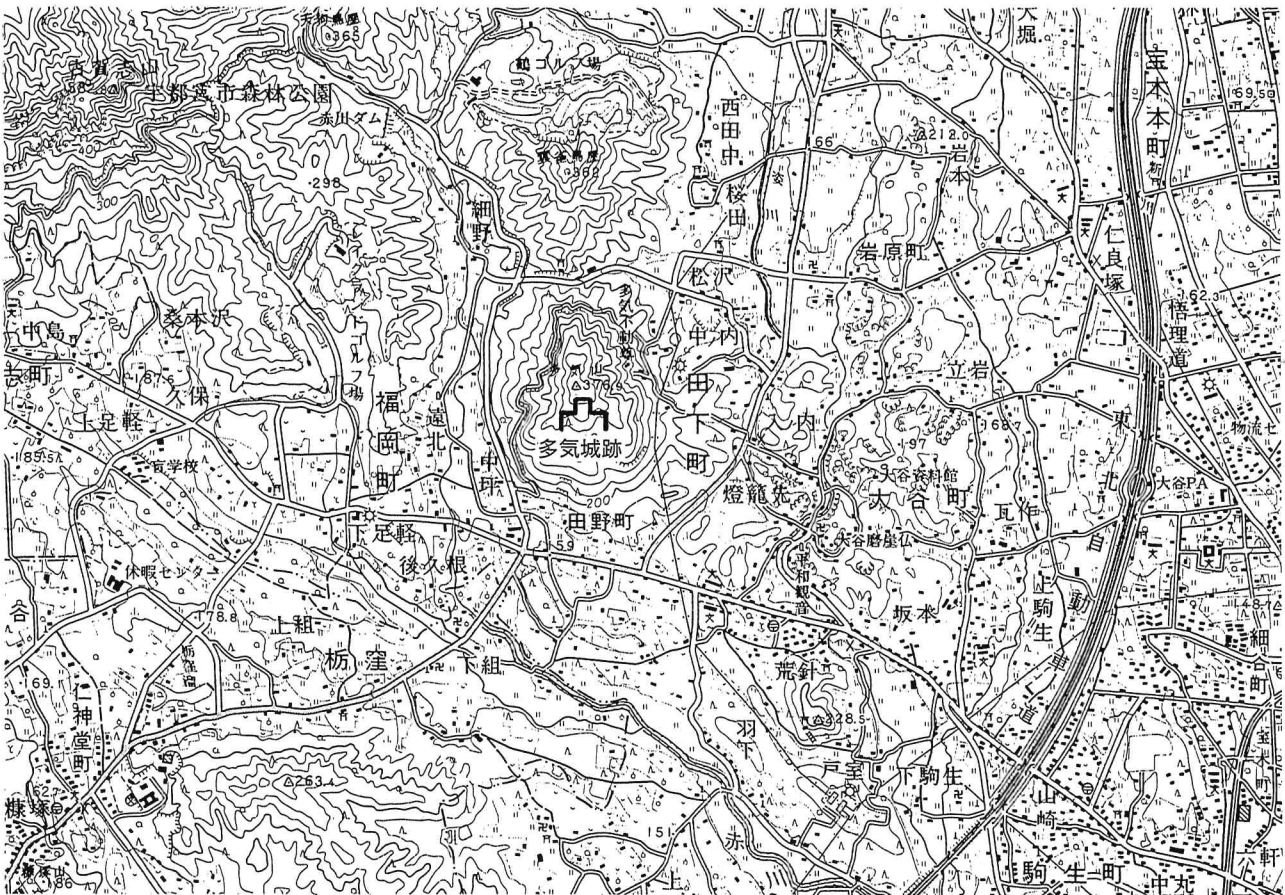
I 調査にいたる経緯

多気城跡は、中世宇都宮氏関係の山城跡として古くから知られていた遺跡であるが、宇都宮市が周知の埋蔵文化財として正式に登録したのは昭和58年のことである。

一方、昭和50年代の当初、多気山に係わる3ルート（東多気線、西多気線、南多気線）の林道建設計画が浮上し、それぞれ年次計画に基づいて麓部からの建設工事が着手された。この内、多気山の西麓から北斜面に抜けるルートの西多気線は昭和57年に全面開通し、南麓から東斜面に抜けるルートの東多気線とこれから南斜面に分かれるルートの南多気線についても、昭和63年までには中腹付近に達した。この時点で、これら林道工事が、遺構に少なからず影響を及ぼしていることが明らかとなり、地元や研究者等から保存を求める声もあがるようになっていた。

このような状況を受けて、平成元年度には、残る林道建設予定部分についての現地踏査を実施し、その後の対応について協議した。この結果、東多気線については、大規模な曲輪内を通過することが明らかとなったが、遺構の破壊は部分的であるとともに全線開通までの残存距離が僅かであることから、記録保存のための発掘調査を実施することとした。しかし、南多気線については、山頂付近の遺構集中部を通過することが明らかとなったため、当面工事を見合わせることにし、この線の残存計画は事実上凍結された。

翌、平成2年度、東多気線残存部分に係わる発掘調査について庁内関係各課と協議を進めた結果、宇都宮市が費用を負担して平成3年度内に調査を実施することとなった。これを受けて教育委員会文化課は、平成3年度予算に発掘調査費を計上し、平成3年11月を目途に調査に着手することとした。



第1図 多気城跡位置図（1：50,000）

Ⅱ 調査概要

1 多気城跡の立地と現状

(1) 位置

多気城跡は、宇都宮市の中心部から北西約8kmに位置する多気山に築かれた山城跡である。石の里として知られる大谷町は、この東麓部となっている。標高377mの多気山は、宇都宮北西部の古賀志山地の南端に位置し、「御殿平」と呼ばれる山頂からは宇都宮及び鹿沼方面が一望できる。西麓から南麓にかけては、姿川の支流である赤川によって開析された低地が広がるが、東麓部は起伏が多く、凝灰岩（所謂大谷石）の露頭も多く見られる。

多気山南麓には宇都宮市と鹿沼市を結ぶ幹線の一つである大谷街道（国道293号線）が通り、約7kmで鹿沼市街に至る。また、西麓には新里・徳次郎方面への幹線（国道293号線）が整備されており、数kmで日光街道に至る。多気山麓は、現在も宇都宮市西部方面の要衝の地となっている。

多気山の東中腹部には、平安時代の開山と伝えられる「多気山持宝院」（真言宗智山派）がある。市指定文化財ともなっている不動明王を本尊とすることから、通称「多気不動尊」として親しまれ、遠方からの参拝客も多い。なお、暖帯林の北縁に位置する多気山樹林帯は植物学的にも貴重であり、「多気山持宝院社叢」として市の天然記念物に指定されている。

(2) 遺構の現状

多気山・大谷町を含む宇都宮市北西部の低山地帯は、美しい自然景観とともに大谷石採掘跡が織りなす得意景観を保護するために県立自然公園区域に指定されている。このため多気山を本体とする城跡の中核部にはほとんど開発の手が及ばず、遺構の遺存状態は良好と言える。これに対し山麓部の幹線沿いは道路整備や宅地造成等の開発が進んでおり、城跡の縁辺を構成する外郭の遺構については非常に危うい状況にあると思われる。多気城跡の現状については、昭和57年に屋代方子氏により、昭和62年に中田正光氏により、それぞれ縄張り図が発表されている。宇都宮市教育委員会では、これらを参考にして平成7年3月に遺構の所在調査を実施し、現状での新たな縄張り図を作成した。

多気城跡の遺構は、多気山全体におびただしい数にのぼるが、①山頂を中心とする山肌（尾根上）に設けた曲輪群、②これら曲輪群の南半部を取り囲む山麓付近の堀、③堀の外側に出丸風に設けられた尾根上の曲輪群の大きく三つに分けられ、急斜面が多い北側は概ね自然の要害となっている。主要遺構の概要はつぎのとおりである。（第2図参照）

I 本丸に相当する部分とみられる。東西約140m・南北約120mで、東西の堀・土塁によって大きく南北に分けられている。南側が主廓部とみられ、現状では東西約100m・南北約40mの平坦面となっている。南側は現状でも4～5mほどの深い堀が切られており、南西隅に虎口が設けられている。

II Iの曲輪から北方に約250m続く曲輪群で、Iの曲輪とは深い堀切によって分断されている。全体的には北下がりの尾根上を利用したものであり、南の高位部に中心的な方形曲輪がみられる。なお、この曲輪群の先端から続く尾根上には、北方の守りを意識したとみられる小規模な曲輪が点在する。

III Iの曲輪から南方に約200m続く曲輪群。Iの主廓部を守る重要な曲輪群とみられ、土塁の枡形による堅固な虎口が設けられている。南端部には70～80mの塹堀が切られている。



第2図 多気城跡縄張図 (1 : 7,500)



山頂の主廓部



山麓部の堀・土塁



土塁に伴う石積み



石垣状の石積み

Ⅳ Iの曲輪から西南西に約250m続く曲輪群。一辺50m級の大規模な曲輪が連続し、中間部には連続する2条の堅堀が認められる。

Ⅴ Iの曲輪から南南東に約500m続く曲輪群。中程にある中心的な曲輪は東西約50m・南北約70mに及び、本城跡では最も規模の大きい曲輪のひとつである。

Ⅵ Ⅳの曲輪群から南東に約300m続く曲輪群。北側に沿って、長さ約150mの堅堀状の沢がみられる。

Ⅶ 外郭の堀から西方へ約500m続く、出丸的な曲輪群。外郭線寄りには馬出し曲輪となっている。

堀A 外郭線を構成する堀。多気山の南山麓をほぼ半周するもので、その延長距離は約2kmに達する。堀は部分的に二重となっており、所々に横矢を兼ねた折りや土橋が設けられている。

堀B 南西山麓部で、堀Aの内側約100m付近に巡る堀。延長距離は約1kmで、形態は堀Aとほぼ同様。

以上、城跡関連遺構の現存する範囲は、約1.6km四方に及ぶが、その目安は次のとおりである。

- ・東限 —— 国道293号線
- ・西限 —— 市道1445号線（もしくは赤川）
- ・南限 —— 市道630号線
- ・北限 —— 市道1876号線（下野萩の道）

なお、平成4年、外郭線の堀Aから南東約500mに位置する割田遺跡の尾根上において、約400mに渡って築かれた堀・土塁が発掘調査され、防御施設の一部と考えられている。



割田遺跡の堀・土塁

2 多気城跡の歴史的背景

伝承によれば、多気城は、康平6年(1063)、宇都宮氏の祖である宇都宮宗円が築城したとされるが、確証はない。また、一説には、天正4年(1576)、宇都宮国綱により築城された(『宇都宮記』、『多気山城構築出陣人名』)という記録もあるが、これも決定的な史料ではないようである。一方、やはり伝承の域を出ないが、文明4年(1472)頃に「多気兵庫頭」が居城していたとの記録(『宇都宮家臣記』)もあり、この頃既に多気城は、宇都宮氏の支城として使用されていたことが窺われる。恐らく、前記した天正4年の築城説等は、この従来之城を大規模に改修した状況を記事にしたものとも考えられる。

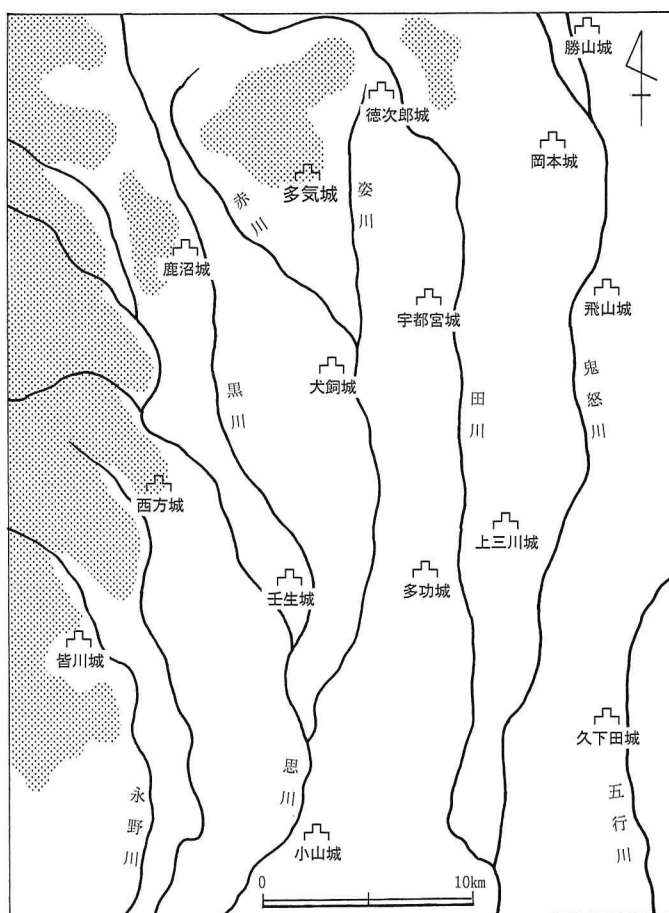
さて、その築城時期については判然としないものの、戦国時代末期の天正年間、宇都宮氏にとって多気城が極めて重要な城になることは間違いない。特に、近年の研究では、国綱の時代に宇都宮城から多気城へ本城を移したことが史料的に明らかにされている。例えば、市村高男氏は、天正13年(1585)9月4日、上総の結城晴朝が越後の上杉景勝に宛てた書状に「国綱居城宇都宮無抱候間、新地被取立候」と記されていることから、既にこの段階で宇都宮氏の新たな本拠多気城の存在は広く人々に知れわたっていたものと考察され、他の文書等においても、多気城がしばしば「新宇都宮」とか「宇都宮新城」と呼ばれていることを指摘されている。さらに荒川善夫氏は、「日光山常行堂常住三十講表白」の奥書に「天正十三年酉乙八月廿八日宮ヨリ田野山(多気山のこと)ヲ城ニ取」と記されていることから、天正13年(1585)8月下旬に多気城に本拠を移したものと推測されている。

この多気城への本城移転は、宇都宮氏の存亡をかけた大事業であり、当時急激に勢力を伸ばしつつあった後北条氏への対抗が、最も大きな要因と考えられている。事実、天正10年代の初めには、多気城の西方約8kmに位置する鹿沼城(壬生氏)が小山城(小山氏)とともに下野の後北条方の拠点となっており、防禦上極めて重要な地点となっている。また、この本城移転については、宇都宮氏と結ぶ常陸の佐竹氏も関わっていた可能性のあることが指摘されている。

いずれにしても、慶長2年(1597)、宇都宮氏の改易とともに、この多気城の機能も停止することになるが、現在でも多気山南麓には「下河原・粉河寺・清願寺・裏町・埜田・扇町」といった宇都宮城下と同じ地名が残っており、城下町も含めて宇都宮城の機能をそっくり多気城に移そうとする壮大な計画であったことが窺われる。

(参考文献)

- 市村高男 「文献資料から見た飛山城の歴史と性格」『史跡飛山城跡保存整備基本計画』宇都宮市教育委員会 昭和63年
 荒川善夫 「中世下野の多気山城に関する一考察」『歴史と文化』第2号 栃木県歴史文化研究会 平成5年



第3図 多気城を取り巻く主な城郭(戦国期)

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査方法

今回の林道東多気線の建設地域は、多気山の東麓部を抜けて持宝院の参道に取り付く部分であり、同線としての最終工事区間であった。この地域は、丁度、多気城の東の守りの要とみられる外郭の堀を張り出させた大規模な曲輪が設けられた部分にあたり、もともとこれを南北に縦断するようになっていた山道を拡幅整備するというのが、今回の計画であった。

今回の工事延長距離約180mの内、城跡遺構に影響を及ぼす恐れがあるとみられたのは延長約80mの区間で、幅は法面工事を含めて8m（路面は4m）の範囲であった。従って、基本的に発掘調査を必要とするのはこの640㎡（80m×8m）の範囲であったが、対象となる遺構が城跡のどの部分にあたるのかを明確にするため、曲輪部全体の遺構所在調査を実施するとともに直接遺構への影響が及ぶ北辺の堀・土塁については、面的な確認調査（対象面積約250㎡）をすることとした。手法は以下の通りであり、土地はそれぞれの所有者の協力を得た。

- 曲輪部全体——この部分は、外郭の堀を大きく張り出させて形作ったものであり、その規模は東西約80m・南北約50mに及ぶ広大なものである。残念ながら曲輪内部には送電線の鉄塔が建てられてしまっているが、全体的には大きな改変を受けた様子はみられない。今回は、取り敢えず下草刈り等の清掃を実施した上で、表面観察を行い、詳細な縄張り図を作成することとした。
- 北辺の堀・土塁——この部分は、曲輪を取り囲む外郭の堀が山側（西方）へ屈曲し、縦堀状に要害な急斜面地へ取り付くところである。また、土塁の内側（南側）には、斜面なりに平坦面を形成した形跡もみられた。そこで、これらの規模構造及び土塁内側の遺構の有無等を確認するために、グリッドによる発掘調査を実施することとした。なお、工事による影響を受けない部分については、最小限の発掘に止めることとした。

2 調査経過

現地作業は平成3年10月1日～同4年1月31日までの4ヵ月間実施した。途中中断期間等があったが、大略は次のとおりである。

10月上～中旬 調査地の伐採・下草刈り及び現況遺構の確認。雨が多かったためやや作業は遅れたが、清掃が進むにつれてこれまで確認できなかった遺構もいくつか現れ、新たな縄張り図を作成することができた。その後、実際の調査区にグリッドを設定した。



下草刈りの状況

10月下旬～ 11月上旬 曲輪北辺の堀・土塁のうち工事により影響を受ける部分を調査し、それらの形状及び石積みの状況等を確認。

石積みについては、一部断ち割り調査を実施したところ、土塁の盛土に差し込まれ土止めのような役割をしていることを確認。また、土塁南側の削平を受けたと思われる平坦面では、焼土や石段状に並ぶ配石等を確認。

また堀についても一部底面まで掘り下げたところ、非常に底面幅の狭い所謂薬研状であることを確認。

なお、堀は山道となっていた部分の手前で立ち上がっていたことが判り、もともと通路であったことを確認。

11月中旬～ 12月下旬 曲輪北辺の堀・土塁のうち、直接工事の影響を受けない部分の確認調査。

土塁・堀の方向性及び長さを確認。規模を徐々に縮小しながら、自然の急斜面部まで延長されていることを確認。

南側の土塁については、石積みの状況を確認するために平面的な確認調査を行ったが、急斜面部に行くに従って石積みが徐々に少なくなっている状況を確認。

また、北側の土塁についても一部調査したところ、堀の掘削に伴って発生したと思われる土礫を単に盛ったようなものであったことを確認。

なお、12月7日には市民向けの現地説明会を実施したところ、200名を超える参加者があった。

1月中～下旬 写真撮影及び図面作成後、工事により影響を受けない部分については埋め戻しを実施し、現地作業を終了。



土塁の調査状況



堀の調査状況



土塁上石積みの調査状況



現地説明会の状況

IV 確認された遺構

1 曲輪部の概要

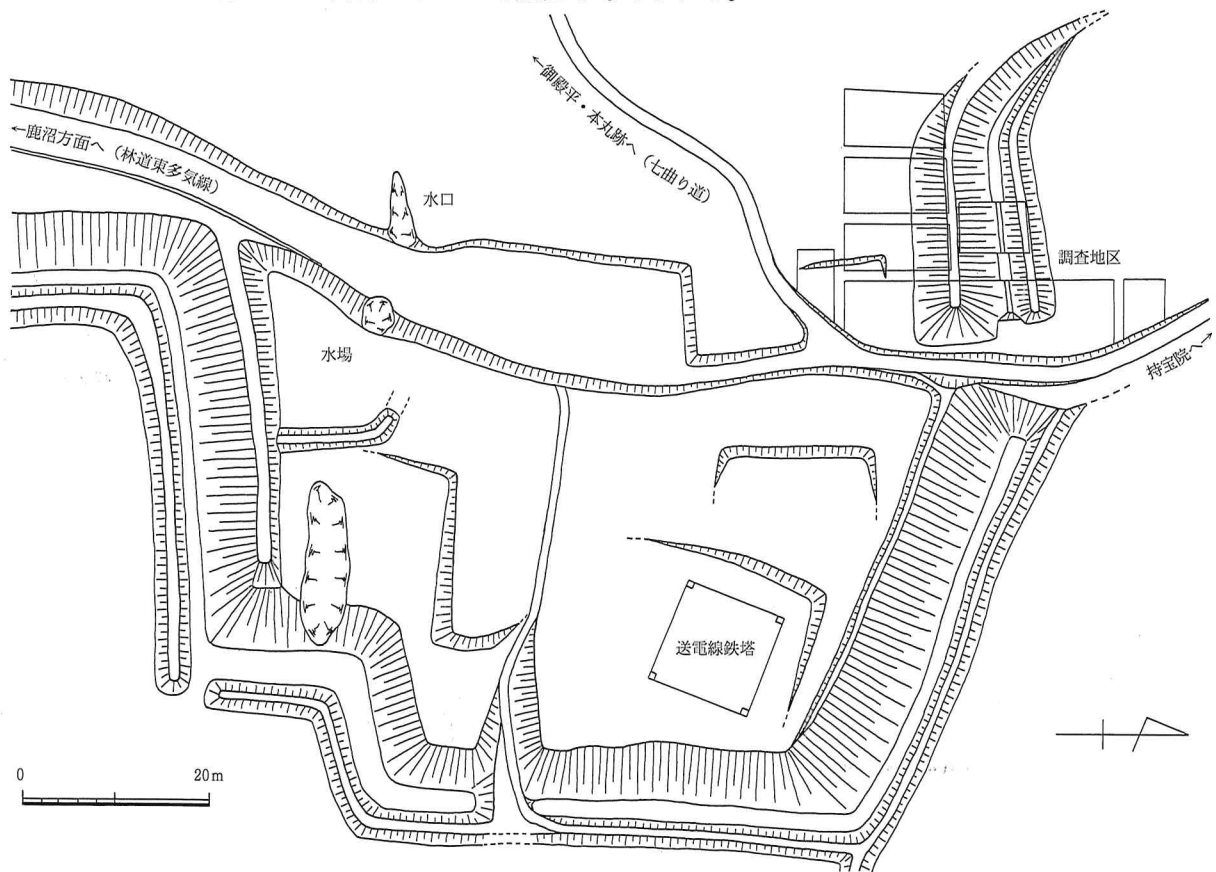
(1) 立地

今回調査の対象となった曲輪は、多気山の東麓部尾根上（第2図参照）に位置する。山頂部を中心におびただしい数の曲輪・堀・土塁で構成される多気城跡は、南麓部にほぼ山を半周する大規模な堀・土塁（総延長約2km）を築き外郭としている。この外郭の堀・土塁は所要所に横矢を兼ねた折りや屈曲を持たせ防御性を高めているが、今回調査の対象となった地点は堀・土塁を一段と大きく突出させ曲輪としている。また、この曲輪が築かれた尾根は、さらに500mほど東方に延びるが、出丸的な曲輪が末端近くまで認められており、東の守りの要として重視されていた様子が窺われる。

なお、多気山北面は急峻な部分が多く、概ね自然の要害となっている。従ってこの曲輪部は、外郭として人工的に整備された北端にも位置し、その意味では北への守りも意識したものとみられる。

(2) 規模・構造

全体的には外郭の堀・土塁を大きく屈曲させる形で、東へ突出する方形の張出し部を形成し、西辺は山道沿いの切土による1～2mの段差で仕切られている。曲輪の規模は南北約70m（山側の基部で）・東西約50mで、尾根全体を巧みに利用して築かれたものとみられる。また、南東隅は約10mほど鍵の手状に折り曲げられているが、これも地形による制約があった可能性も考えられる。



第4図 曲輪部縄張図

曲輪を取り囲む堀は、遺存状態の良好な南辺部でみると基本的には内外に土塁を伴うものとみられ、その規模は幅約10m・現状での深さ5～6mを記録する。緩やかな尾根を削り出すような形で構築されたとみられ、特に堀の内側は見上げるような急斜面となっている。

虎口は東辺と北辺に、それぞれ1箇所ずつ設けられている。東辺の虎口は南東隅から北へ約10mの地点に位置する。外郭の堀に幅約3mの土橋がかけられ、現状では曲輪内部を切り通すように通路が設けられている。また、北辺の虎口は北東隅から西へ約50mの地点に位置する。ここは、鹿沼方面から持宝院への通路として最近まで使用されていた山道部にあたり、後述するように調査の結果掘り残しの土橋になっていたことが判明している。通路としてはかなり古い段階から機能していたものと考えられる。

曲輪内部については送電線鉄塔建設・植林及び自然崩壊等、部分的な改変はみられるが、全体としての遺存状況は良好と思われる。まず、南西隅には山水を溜めたと思われる遺構がみられる。この地点は、現在でも出水が多いところであり、幅2～3m・高さ1m程度の小規模な土手で一角を囲み、貯水場とした形跡が認められる。次に、南東部には外郭の土塁・堀と同様な鍵の手状の折りを有する段差が設けられている。この段差は、東辺の虎口に面する部分では2m近い比高があり、基部には自然石の積石もみられる。現在の通路はこの段差を直登しているが、当時は遮蔽されていた可能性が高い。なお、北半部には目立った遺構はみられないが、現在送電線鉄塔が建っているあたりは、立地的にも櫓台が設けられていたものと考えられる。

2 北辺の堀・土塁

(1) 概要

前述した曲輪の北辺は、現在も通路として使われている山道の手前で一端途切れ、さらに山側へ約40mほど延ばされている。この部分は特に曲輪は形成せず、一組の堀・土塁が縦掘状に山を縦断し、急峻な岩場へ取り付くような形に仕上げられている。この岩場への取り付け部では、急斜面となる自然地形を生かしながら、大きくカーブさせて堀を切っているのが特徴的である。

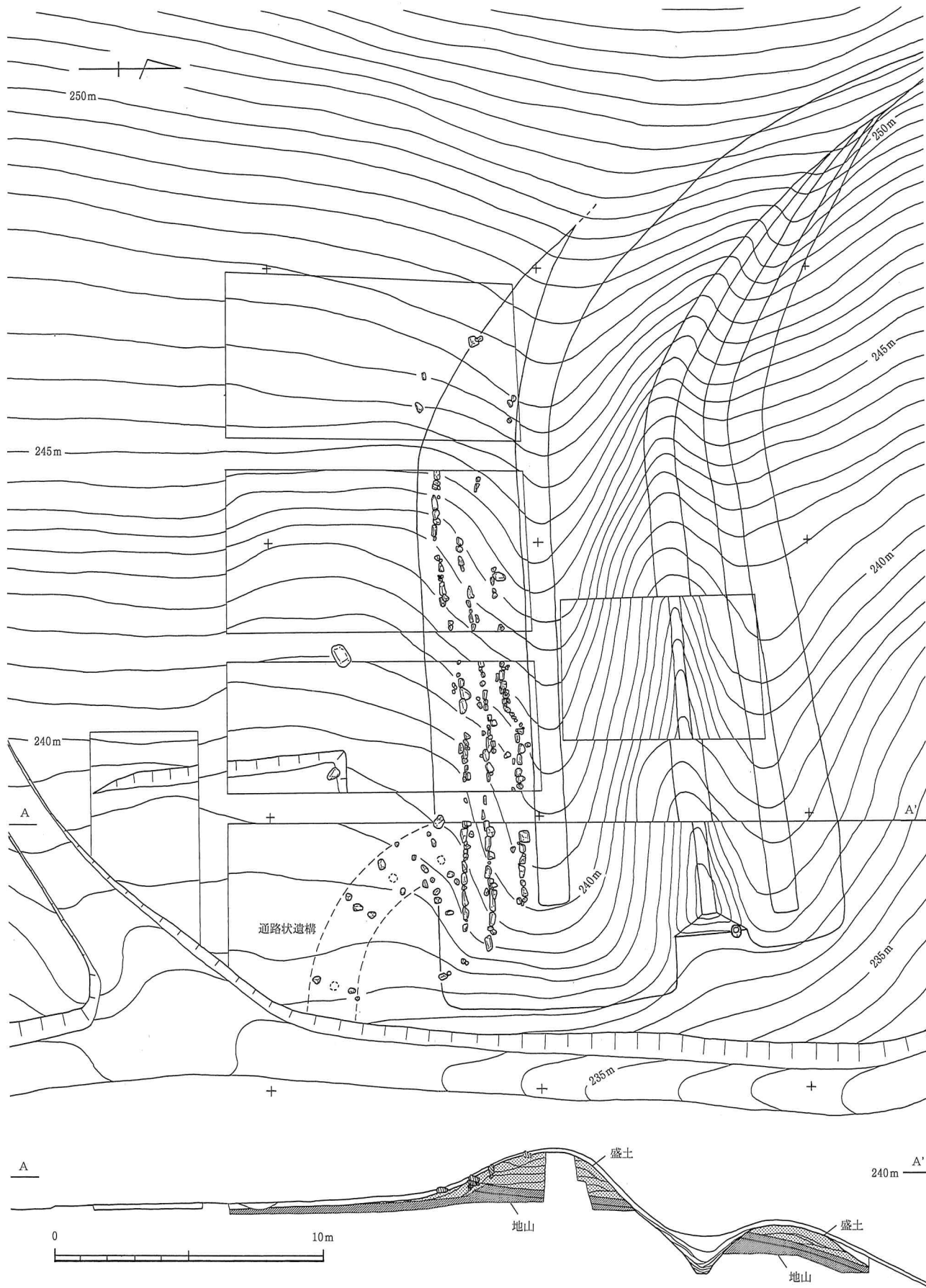
第2図に示したとおり、この堀・土塁は尾根の北側斜面にさしかかった部分に築かれている。基本的には堀の両側に土塁を有する形態をとるが、上部急斜面部に行くに従って全体に規模が縮小するとともに、土塁は不明瞭となり、堀も山側のみを切って段差とするような形で収束させている。また、南側（内側）の土塁は北側（外側）のそれに対して規模が大きく造りも丁寧である。因みに通路寄り地点での土塁を含めた堀の規模は、幅約8m・深さ約3mを記録する。



土塁と石積み（南から）



堀と土塁（西から）



第5図 北辺の堀・土塁全体図

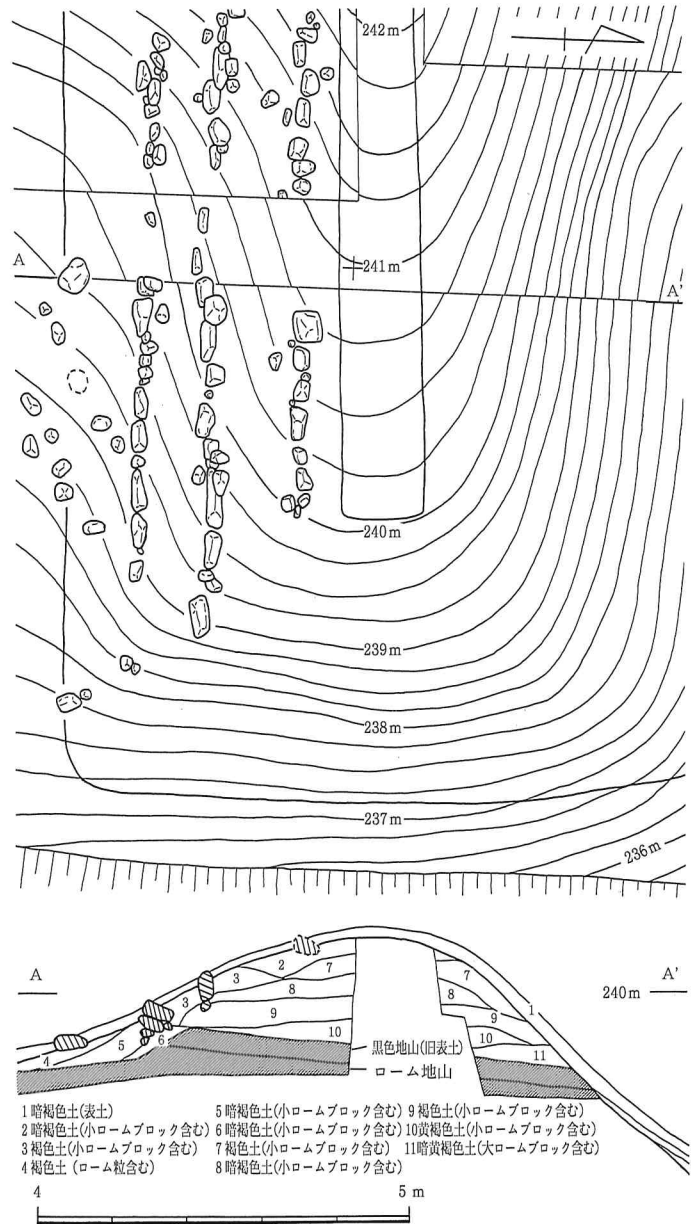
(2) 内側土塁と石積み

この土塁は、前記したとおり、上部に行くに従って徐々に規模を減じるが、下部の通路近くでの規模は、幅7.5m（基底部）・高さ1.8mを測る。頂部に若干の平坦面が造られ、斜面は谷側が少し急に仕上げられている。第6図は通路から約10m西で確認した土塁断面であるが、緩斜面上に巧みに盛り土した様子を窺うことができる。まず、基底部谷側にロームブロックを多量に含んだ土（⑩）が積まれ、これを土留めとするようにして基底部全体に土（⑩）が盛られる。この段階で盛土面はほぼ平坦とされ、その後、厚さ30～40cmを基本として4層（⑨・⑧・⑦・②）がほぼ水平に積まれる。いずれもロームブロックや礫を多く含んだ層で、固く叩き絞めるように積まれている。

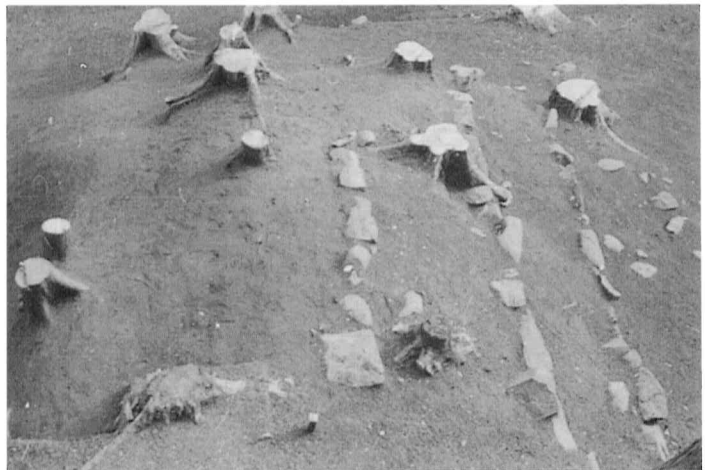
土塁盛土の大部分は山側（南側）から集められたものとみられる。第6図に示したとおり、基底部成形の際に山側が50cmほど掘り込まれ、それはローム層まで達している。さらに、この掘り込み面は山側10数mまで確認でき、土塁を築くのに際して山側をローム面まで幅広く掘削し、土を確保したことがわかる。調査前の現状で確認された土塁山側の平坦部は、この時形成されたものであった。

土塁の南斜面（山側）には特徴的な石積みが見られる。通路で途切れる小口部と北斜面（谷側）にはみられないことから、曲輪全体から見れば、内側だけに設けられたものということになる。この石積みは小口部との稜線から上部にかけて約18mの区間に渡り、やや不整な部分もあるものの3段（3列）に築かれている。その間隔は80cm～1m前後である。

積まれた石は通称多気石（田下石）と呼ばれる安山岩の割石で、多気山の基盤となっている岩石である。大きさは20～30cmのものから70～80cmのもの大小様々であり特に揃えている様子はみられない。平面的には一見これらを無造



第6図 内側土塁と石積み



石積みの状況

作に横に並べただけのようであるが、断面で見るとかなりしっかりと構築されたものであることが分かる。いずれも盛土の過程で、内部に食い込ませるように固定しており、特に第1段目は丁寧で、下部に控え積みの石まで入れている。

以上のことから、おそらくこの石積みは、曲輪内部から土塁上に登るための石段あるいは武者走りのものとして構築されたものと思われる。なお、この土塁南側の平坦部には、曲輪内部との連絡に使用されたと思われる、幅1.5m程の石段的な施設を伴う通路状遺構(第5図参照)が確認されている。



石積みの断面

(3) 堀

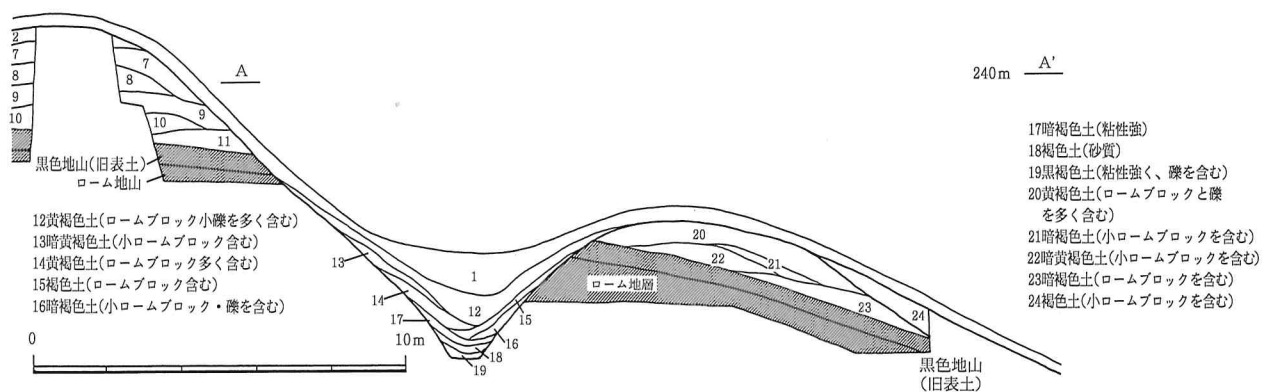
第7図は通路から約10m西で確認した堀の断面であるが、斜度10度の地山を鋭く掘り込んでいる様子が窺える。掘込みの角度は内外とも50度前後と鋭く、底面は幅40cm程度と、やっと一人一人が歩けるほどの狭さに仕上げられている。断面V字形の所謂「諸薬研堀」の形態をとっている。また、山側(南側)での実際の掘り込みの深さは約2.5mであるが、その上端から盛り上げられた土塁の斜面を加えると、堀底から土塁頂部までの比高は約5mに達している。



堀の断面

堀内には全体に約2mの堆積層が確認されている。土質・色調及び礫の含有量等から9層程度に分層されるが、基本的にはすべて自然埋没層であり、その多くは内外の土塁からの自然崩落土とみられる。また今回調査した範囲では、特に改修等のために掘り返しを行ったり、人為的に埋め戻したりというような形跡は確認されていない。

なお、堀底の形状については、部分的な調査ではあるが、仕切りや段差が付けられた様子はみられず、基本的には平坦に仕上げていたものとみられる。



第7図 堀と外側土塁の断面図

(4) 外側土塁

堀外側の土塁は、幅4.5m（基底部）・高さ0.8mと、内側土塁に対して規模は小さい。盛土手法に関しても内側土塁ほどの丁寧さや工夫は見られず、基本的には堀の掘削土を単純に外側へ積み上げたものと思われ、その分谷側への崩れ（流れ出し）も多い様である。なお、頂部表面には礫が比較的多く見られたことから、崩れを止めるために意識的に置かれたものとも考えられる。

(5) 土橋

現在の通路から約3m西のところで、堀の立ち上がりを確認されている。また通路を挟んでこれに続く、北辺を画す堀については、調査はしていないものの、通路手前で立ち上がっていることは明らかである。従って、現在通路となっている部分は、7～8m幅の掘り残しによる土橋ということになり、当時から出入り口（虎口）として機能していたことが確認された。なお、立ち上がりの上端から柱穴が1本（径35cm・深さ65cm）確認されたが、門に係わるものとも考えられる。



土橋と柱穴（南西から）

V まとめ

今回の発掘調査は林道建設によって影響を受ける範囲ということで、多気城跡全体からみれば極めて部分的な調査であった。ただし、踏査等による表面調査はこれまでに何度かなされていたものの、本格的な発掘調査が入ったのは今回が初めてであり、多気城跡の実態を知る上では大きな意味があったものと思われる。

特に今回は、多気城跡で最も主要な遺構である曲輪を構成する堀・土塁が調査対象になったわけであるが、本来の規模や形状を復元することができたとともに、断面観察により構築技術を確認することもできた。中でも土塁内側で確認された石積みは、盛土をしながら石を積み込むという独特な手法によるものであることが明らかとなった。しかも、これらは一般に言われる石垣とは大きく趣を異にするものであり、土塁斜面に3段（3列）に積まれた状況はまさに石段と言うに相応しく、曲輪内から土塁上への登り降りのためのものであったと考えられる。このような石積みが、多気城跡で無数にみられる土塁の一般的な手法であったかどうかは今後の調査をまたなければならないが、今のところ近隣の同時代の城跡にはみられないものであり、多気城を特色付ける築城技術の一つとなる可能性も考えられる。なお、残念ながら今回の調査では、年代推定の手掛かりとなるような遺物の出土はみられなかった。

いずれにしても多気城は、中世宇都宮氏の動向を知る上で欠かすことのできない重要な城であり、特に戦国時代末期の天正年間には本城として機能したことも明らかになっている。またその規模（約250ha）は山城としては関東屈指と言われるとともに、幸いにも大きな開発から免れているために中心部の遺存状況は極めて良好である。今後さらに城としての解明を進めるのは勿論のこと、宇都宮市の貴重な文化遺産として恒久的な保護措置を講じて行くことも大きな検討課題と言える。

報告書抄録

ふりがな	たげじょうせき
書名	多気城跡
副書名	林道東多気線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第42集
編著者名	梁木 誠
編集機関	栃木県宇都宮市教育委員会
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL028-632-2764
発行年月日	西暦1997年(平成9年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たげじょうせき 多気城跡	とちぎけん 栃木県 うつのみやし 宇都宮市 たげまち 田下町 725-2 他	0921	134	36度 36分 0秒	139度 48分 30秒	平成3年10月1日 } 平成4年3月31日	890㎡	林道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
多気城跡	山城跡	中世(戦国期)	堀 土塁 土橋跡		石積み

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第42集

多 気 城 跡

平成9年3月発行

発 行 宇都宮市教育委員会文化課
(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (028) 632-2764

印 刷 下野印刷株式会社
(宇都宮市宝木町1-28)

TEL (028) 622-6953
